

令和2年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール研究実施報告（第3年次）（概要）

1 研究開発課題名
 学校、地域、社会のリソースを活用したチャレンジ精神豊かな地域創生ジェネラリストの育成
 ～高付加価値をめざした商品開発と持続的な開発のための教育実践～

2 研究の概要
 チャレンジ精神豊かな地域創生ジェネラリストを育成するために、以下に示すスキル・ビュー・マインドの3つの力を育むことが必要であると考えます。
 (1)【スキル】高度な知識・専門技術
 (2)【ビュー】グローバルな視座を持って考える力
 (3)【マインド】チャレンジ精神を喚起する姿勢を持って行動する力
 そこで、本研究では15の研究プロジェクト(以下15事業と略す)及び共通教科での取組みを通して、高付加価値化をめざした商品開発と持続的な開発のための教育実践を展開することで、生徒のスキル・ビュー・マインドの3つの力を涵養する。また、これら3つの力を涵養するために体系的・系統的な学習プログラムを構築する。

3 令和2年度実施規模 ○本校SPH事業を取り巻く概要図(実施規模)

各研究プロジェクトの内容	教育課程上の位置づけ	各事業の実施状況		
		平成30年度 第1年次	令和元年度 第2年次	令和2年度 第3年次
ア.学校農場におけるリソース循環システムの構築	1 農芸高校ブランドをめざした農産物の高付加価値化	ハイテク農芸科1～3年「総合実習」 ハイテク農芸科2,3年「栽培技術」課題研究 ハイテク農芸科3年「園芸栽培」「農業経営」	実施	(研究)
	2 ゼロエミッションの構築	資源動物科1～3年「総合実習」「畜産」 資源動物科2,3年「課題研究」	実施	(研究)
	3 未利用資源の飼料化「エコフィード」	資源動物科1～3年「総合実習」「畜産」 資源動物科2,3年「課題研究」	実施	(研究)
イ.地域・企業・大学・農政等のリソースの活用・循環	4 農作業の可視化・数値化	全学科1年「農業と環境」1～3年「総合実習」 全学科2,3年「課題研究」	実施	(研究)
	5 GAP教育の導入	ハイテク農芸科3年「環境制御」 食品加工科3年「農業経営」	実施	(研究)
	6 農芸高校ブランドをめざした高度な食品製造技術の習得	食品加工科1～3年「総合実習」 食品加工科2,3年「課題研究」	実施	(研究)
ウ.地域課題解決への参画	7 農芸高校ブランドをめざした商品開発	資源動物科1～3年「総合実習」「畜産」 資源動物科2,3年「課題研究」	実施	(研究)
	8 発信力の強化から地域創生へ	全学科2,3年「課題研究」「総合実習」 全学科1～3年「総合実習」	実施	(研究)
	9 地域食文化・伝統食文化の理解・伝承	資源動物科2,3年「課題研究」「総合実習」	実施	(研究)
	10 高校生カフェレストランの運営	食品加工科2,3年「課題研究」「総合実習」	実施	(研究)
	11 子ども食堂への参画	全学科2,3年「課題研究」「総合実習」	実施	(研究)
エ.ESDの推進	12 災害時の非常用備蓄食品の開発	全学科2,3年「課題研究」「総合実習」	実施	(研究)
	13 「ネリカ米」の栽培と普及活動	ハイテク農芸科1～3年「総合実習」 ハイテク農芸科2,3年「課題研究」	実施	(研究)
	14 動物を介した教育活動・食育活動	資源動物科1～3年「総合実習」 資源動物科2,3年「課題研究」	実施	(研究)
	15 国際交流活動の推進	全学科1～3年「ホームルーム活動」、特別活動	実施	(研究) 未実施
共通教科の推進	学年 全学年	全学科全学年「ホームルーム活動」、特別活動	実施	(研究)
	普 英語	全学年全学科	—	実施 (研究)
	普 国語	全学年全学科	—	実施 (研究)
	普 数学	全学年全学科	—	実施 (研究)
	普 理科	全学年全学科	—	実施 (研究)
	普 社会	全学年全学科	—	実施 (研究)
	普 保健体育	全学年全学科	—	実施 (研究)
事業評価方法の研究・研究発表の企画・運営・推進	全教員・全生徒	—	—	実施 (研究)

※令和2年度（SPH事業第3年次）については新型コロナウイルス感染対策により実施ができなかった事業を「未実施」として明記

○ 学年・課程・学科別生徒数(実施規模:令和3年1月現在)

課程	学科	第1学年			第2学年			第3学年			計		
		定員	実生徒数	学級数	定員	実生徒数	学級数	定員	実生徒数	学級数	定員	実生徒数	学級数
全日制	ハイテク農芸科	40	39	1	40	38	1	40	35	1	120	112	3
	食品加工科	80	80	2	80	77	2	80	76	2	240	233	6
	資源動物科	80	79	2	80	78	2	80	70	2	240	227	6
計		200	198	5	200	193	5	200	181	5	600	572	15

○ 教職員数(実施規模:令和3年1月現在)

校長	教頭	首席	指導教諭	教諭	再任用等	養護教諭	期限付講師	非常勤講師	実習助手	事務職員	技師	計
1	1	2	1	39	13	1	8	11	2	6	7	92

4 研究内容
 (1) 研究計画(指定期間満了まで。5年指定校は5年次まで記載。)

第1年次	①本研究の目的である3つの力(スキル・ビュー・マインド)を持った地域創生ジェネラリストを育成 ②科目「課題研究」「総合実習」を中心に15事業を実施する。
第2年次	①本研究の目的である3つの力(スキル・ビュー・マインド)を持った地域創生ジェネラリストを育成 ②科目「課題研究」「総合実習」を中心に15事業を実施してブラッシュアップを図る。
第3年次	①本研究の目的である3つの力(スキル・ビュー・マインド)を持った地域創生ジェネラリストを育成 ②科目「課題研究」「総合実習」を中心に15事業を実施してブラッシュアップを図る。ロジックモデルを作成して「社会に開かれた教育課程」のカリキュラム開発に繋げる。

○教育課程上の特例(該当ある場合のみ) なし

○令和2年度の教育課程の内容(令和2年度の教育課程表を含めること) 別紙参照(文末に添付)

○具体的な研究事項・活動内容

(2) 研究方法(取組内容)

本校の特色ある15事業及び共通教科の取組みを実施して、3つの力を育んだ。15事業については、科目「課題研究」「総合実習」における研究活動として行った(図4-1)。



図4-1 本校 SPH 事業3ヶ年の各研究プロジェクトにおける実施状況

(3) 魅力ある授業づくりをめざした共通教科の展開

本校の共通教科である外国語(英語)、国語、数学、理科、地理歴史・公民(社会)、保健体育において、3つの力を育むために魅力ある授業づくりに取り組んだ。

(4) 15事業における生徒の変容の可視化

15事業及び共通教科の研究や授業がどのように展開され、生徒のどのような成長(変化)に結び付いていくのかを、各事業の実施(インプット)⇒結果・生産(アウトプット)⇒成果(アウトカム)・社会的インパクトとして整理し、研究プロジェクトごとにまとめた。また、具体的な資質・能力の変化については、次の合計13項目でアンケート調査により確認し、その結果をスキル・ビュー・マインド別にした。

- ①【スキル】……高度な知識、専門技術、課題発見力、行動力、実行力
- ②【ビュー】……社会貢献度、郷土愛、国際意識、創造力
- ③【マインド】……主体性、豊かな人間性、キャリアプランニング、チャレンジ精神

アンケートは各年度の事業終了後に15事業と共通教科で各々実施した。

(5) 事業評価方法の開発

① 評価方法の開発

本研究の目的である「チャレンジ精神豊かな地域創生ジェネラリストの育成」に必要な3つの力の達成に資する生徒の学習面の変化を定性的・定量的に評価するために、科目「課題研究」「総合実習」において、各学科

の専攻生が日々の学びを振り返られるようポートフォリオを新たに導入した。

また、効果測定を行う方法として、15事業の取組み以外にも、授業への取組み、共通教科への取組み、学校生活等についてアンケート調査を実施した。さらに、農業クラブにおける各種競技会や発表会での入選数、関係する資格の取得数、各種検定の合格数、外部コンクールへの投稿数やその入選数等については、本事業の進行による変化が確認できるようロジックモデルとして取りまとめた。

② 15 事業における生徒の変容

各事業実施後の生徒の学年変化を示す指標として、3つの力の指標を用いて生徒の変容を可視化して確認した。資質・能力の自己評価アンケートでは、生徒の自己認識の変化について調査した。特に、各事業実施における能力の涵養についてはポートフォリオを用いて確認した。スキル・ビュー・マインドの3つの力における評価については、熟達度別に評価するため、チェックリストやルーブリックを開発して評価することをめざした。

5 研究の成果と課題

(1) 新しい学力観を用いて生徒の変容を可視化する

表 5-1 15 事業の生徒の変容(3ヶ年)

表 5-2 共通教科の生徒の変容(3ヶ年)

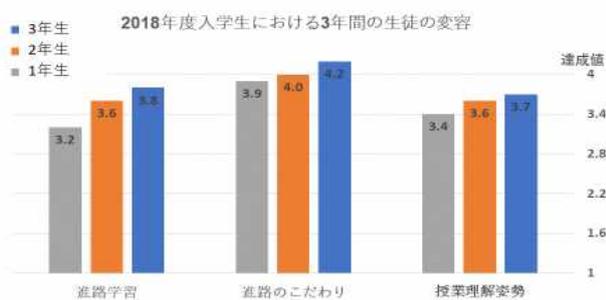
達成項目	関連性のある資質・能力	15事業の達成値						達成項目	関連性のある資質・能力	共通教科の達成値 (4段階自己評価)		
		平成30年度(第1年次)		令和元年度(第2年次)		令和2年度(第3年次)				平成30年度 (第1年次)	令和元年度 (第2年次)	令和2年度 (第3年次)
		達成値	達成値(4段階自己評価)	達成値	達成値(4段階自己評価)	達成値	達成値(4段階自己評価)					
スキル	高度な知識	3.1	3.2	3.2	3.3	3.4	3.5	スキル	高度な知識	3.4	2.9	3.0
	専門技術	3.1	3.1	3.2	3.2	3.4	3.4					
	課題発見力	3.1	3.2	3.3	3.3	3.4	3.4					
	行動力	3.0	3.1	3.1	3.1	3.3	3.3					
	実行力	3.0	2.9	3.2	3.3	3.3	3.3					
ビュー	社会貢献度	3.2	3.1	3.1	3.2	3.2	3.2	ビュー	社会貢献度(規範意識)	3.3	2.9	3.0
	郷土愛	3.4	3.2	3.2	3.4	3.4	3.4					
	国際意識	3.1	3.0	3.0	3.1	3.1	3.1					
	創造力	3.2	3.2	3.2	3.2	3.5	3.5					
	主体性	3.4	3.4	3.4	3.4	3.7	3.7					
マインド	豊かな人間性	3.2	3.1	3.2	3.2	3.5	3.5	マインド	豊かな人間性	3.3	2.8	3.0
	キャリアプランニング	3.2	3.2	3.2	3.4	3.4	3.4					
	キャリアプランニング	3.2	3.2	3.2	3.4	3.4	3.4					
	キャリアプランニング	3.2	3.2	3.2	3.4	3.4	3.4					
	チャレンジ精神	3.1	3.0	3.0	3.3	3.3	3.3					

表 5-1, 2 に本事業における3ヶ年の 15 事業及び共通教科の生徒の変容を示す。すべての項目において目標値 2.8(60%)を達成しており、生徒の自己認識の高まりを確認できた。

特筆すべき変化として、本事業実施前2017年度と3年間本事業に取り組んだ生徒(2018年度入学生)について学びの基礎診断を活用して定量的に比較したところ、進路学習、進路のこだわり、授業理解姿勢が向上した(表 5-3)。特に、進路面については「できればこだわりたい」、「自分で進路情報を収集している」と最も多く回答している。また、本事業に採択された2018~2020年度の生徒の中で特に頑張ってきた生徒を15名抽出して定性的な変化を追跡した結果、入学時(初期値)と卒業時(各最新値)を比べると、学習面(生活面)と自我同一性にポジティブな変化が見られた。次に、学校独自アンケートにおいて3つの力と関連性のある資質・能力のうち、「課題解決力」と「キャリアプランニング」について15名の生徒の自己認識が大きく向上した(表 5-4)。

表 5-3 2018 年度入学生の変容

表 5-4 15 事業における生徒の変容



ポジティブな変化	全体平均(参考値) (2020年度3年生)	15名の平均 (各最新値)	15名の平均 (初期値)	15名の伸び平均	15名中 数値が向上した人数
学習力(生活面)	2.7	2.9	2.8	0.10	8
学習力(教科面)	3.1	2.8	2.9	-0.04	5
自我同一性(自我確立度)	46.3	51.3	43.9	7.43	10
自我同一性(社会性確立度)	52.9	58.0	52.7	5.30	9
Q19. あなたは学習する専門分野の課題解決に向けて行動することができる。	2.8	3.2	2.8	0.4	9
Q26. 自分の将来の職業に対する意識が高い。	3.0	3.4	3.1	0.3	6

(2) 本校生徒の進路実現に向けたチャレンジ

表 5-5, 6 に本校生徒の進路実現に向けた3ヶ年の結果を示す。本事業最終年度となる本年の進学者試験の合格率は92.6%(前年度比 1.08)、就職試験の合格率は88.6%(前年度比 0.96)と、新型コロナウイルス感染症拡大の中、生徒たちは自らの進路を開拓すべくチャレンジ精神をもって取り組んだ。なお、特に今年の進学者数の割合が最も高く、また就職内定率は100%である。特にこの3ヶ年、国公立大学への進学が顕著である(表 5-5)。大学合格者の総数の増加はもちろんだが、今年度の受験合格率92.6%(前年度比 1.08)となった理由としては、科目「課題研究」「総合実習」で取り組んだ15事業のプロジェクト学習を通じて、生徒自身の専門性の向上および

チャレンジ精神の向上が要因として考えられる。

就職に関しては、コロナ禍ではあったが、令和2年度の求人数(企業数・求人数)は、例年と比較すると微減であった(表 5-6)。しかし、本校では例年と変わらない内定率を維持することができた。近隣校では平均2割ほど低下している高校が多い中、本校において維持することができたのは、日頃の授業の中で磨かれる知識・技術を求人先の企業から評価していただいた結果だといえる。平成 30 年度以降の生徒の傾向としては、本校に送付される求人票の中からではなく、自分自身で高校時代に学んできた専門分野が活かせる専門的な職業を自ら開拓し、そこにチャレンジする生徒が増えてきている。

表 5-5 SPH 事業3ヶ年における進路先抜粋

進学	就職
帯広畜産大, 宇都宮大, 岐阜大, 公立長野大, 鳥取大, 高知大, 愛媛大, 琉球大, 京都教育大, 島根大, 明治大, 近畿大, 摂南大, 龍谷大, 東京農業大, 公立鳥取環境大, 大阪南医療センター附属看護	堺ハーベストの丘, 蔵尾パーク, 京阪百貨店, 大阪府職員, 中村オリジナルぶどう園, 株式会社ロッテ, 西日本旅客鉄道, 田中食品興業所, ふるさとたまご村

表 5-6 平成 27 年度～令和2年度における卒業生の進路状況一覧

SPH 実施年度	進学者数(%)	就職者数(%)	SPH 実施前	進学者数(%)	就職者数(%)
令和2年度	140(77.3)	41(22.6)	平成 29 年度	134(71.7)	48(25.7)
令和元年度	131(72.8)	41(22.8)	平成 28 年度	136(70.8)	54(28.2)
平成 30 年度	128(67.0)	54(28.2)	平成 27 年度	125(67.9)	56(30.4)

(3) 評価方法の開発

① ポートフォリオの開発

ポートフォリオは、本事業で新たに取組んだ授業評価の1つである。1年次の研究でポートフォリオの内容を決定し、各学科で試行を開始した。2年次以降、各学期に実施して、生徒の学びを振り返る機会として運用を開始した。各学科において、生徒に学習させたい内容の達成度が見える化でき、各事業における3つの力の習熟度を把握することができた。ポートフォリオを実施したことで、各事業において生徒が何を学んで、どのように成長したのかという内容を把握することができた(表 5-7)。また、自己評価と他者評価の差を理解することで、自身の「強み・弱み」を知ることができ、授業意欲の向上に繋がっている。

② パフォーマンス評価法の開発

定期テストや小テストのように達成・未達成(知っている・知らない、できる・できない)の二分法では評価できないパフォーマンスの質(熟達度)を評価するため、また、生徒の自己学習や自己評価能力の育成を促し、評価の透明性を高めることを目的に、以下の評価基準を開発して試行した(表 5-8)。チェックシートについては分野や学年別で目標設定を行い、生徒が何を、どれくらいできるようになったのか、具体的に可視化することができた。また、ルーブリックを用いることで、教員は生徒が授業で何ができるようになったかを明確にする意識が高まり、生徒は自分自身の身に付いた力を可視化することに繋がっていると考えられる。さらに、学科や教科等の特色に応じた評価方法を開発することで、これまで各教科(教員個人)でしか生徒の成長を把握することが難しかったが、評価法を統一し、共有することで、学科レベルで生徒の成長を把握できるようになった。

表 5-7 ポートフォリオ(簡易版)

大阪府立農芸高等学校 生徒用ポートフォリオ		当てはまるところに○をつける。			
課題研究・総合実習 ()年 ()組 ()番 氏名()		(自己評価)		(教員評価)	
達成項目	具体的な場面や行動を挙げよう	自分自身	同級生	先生	他者
専攻の専門分野で何を学び、何ができるようになりましたか?					
あなたの研究は地域や社会に対し、どのように役立ちますか?					
あなたは将来、専攻での学びをどのように生かしていきますか?					
		学期評価(教員評価)			
		A B C D			

表 5-8 科目「総合実習」におけるルーブリック表

到達目標	2年	70%以上	20%以上	5%以下	5%以下	
						3年
観点	資質能力	定義	よくできる	できる	あまりできない	できない
			4	3	2	1
スキル	課題発見力	学習した専門分野の課題が何かを理解している	学習した専門知識を整理して、現状の課題を分析している	学習した専門知識を通して、現状の課題を理解している	学習した専門知識の中で、現状の課題を見つけ出そうとしている	学習した専門知識の中で課題を発見することができない
ビュー	国際意識(多様性)	自分の考えを人に正確に伝えることができる	報告・連絡・相談があり、自分の考えを相手に正確に伝えることができる	報告・連絡・相談があり、ある程度自分の考えを相手に伝えることができる	あまり報告・連絡・相談がなく、自分の考えを相手に伝えることができていない	報告・連絡・相談がなく、自分の考えを相手に伝えることができない
マインド	主体性	授業や実習に積極的に取り組むことができる	課題に対して、主体的に活動しており、熱心である	課題に対して、主体的に活動している	あまり課題に対して、主体的に活動できていない	課題に対して、主体的に取り組めていない

(4) ロジックモデルの作成

15 事業及び共通教科における3年間の研究成果の中でも代表的な実践の生産・結果(アウトプット)を事業テーマ別に示す(表 5-9)。

表 5-9 SPH 事業3ヶ年の 15 事業における成果一覧

SPH事業3ヶ年の各研究プロジェクトにおける成果一覧				
テーマの柱	事業番号	事業テーマ	代表的な教育実践(生産・結果:アウトプット) ～学校、地域、社会のリソースを活用した地域チャレンジ～	
ア.学校農場におけるリソース循環システムの構築	1	農芸高校ブランドをめざした農産物の高付加価値化	高島屋北店・イオンモール堺北花田店での販売	
	2・3	ゼロエミッションの構築 未利用資源の飼料化「エコフィード」	農芸マザービーフ大阪産登録、エコステーション設置、農芸エコフィード、HACCAP推進農場	
イ.地域・企業・大学・農政等のリソースの活用・循環	4・5	農作業の可視化・数値化 GAP教育の導入	ドローン操作講習、IOT・GAP講演、全学科共通のGAP学習	
	6	農芸高校ブランドをめざした高度な食品製造技術の習得	イチゴ・イチジク・ブルーベリー・ミルクジャム、トマトケチャップ製造・販売	
	7	農芸高校ブランドをめざした商品開発	のうげいボーク・鴨フランス販売	
ウ.地域課題解決への参画	8	発信力の強化から地域創生へ	農芸ボークンチュウの開発・販売、出張パン教室、酪農教育ファーム活動、認定牧場	
	9	地域食文化・伝統食文化の理解・伝承	あかね餅・和菓子の開発・販売、鴨フランスの販売、1日高校生カフェレストラン	
	10	高校生カフェレストランの運営	高校生カフェレストランと出張カフェレストランの運営	
	11	子ども食堂への参画	美原区役所との連携によるバター作り体験、牛乳啓発活動	
	12	災害時の非常用備蓄食品の開発	カレー・粥・豚汁のレトルト食品の開発	
エ.ESDの推進	13	「ネリカ米」の栽培と普及活動	ネリカ米の栽培とイオンモール・ワンワールドフェスティバル等での広報活動	
	14	動物を介した教育活動・食育活動	馬介在教育セミナーや学会発表、地域の小中学校への食育教育ファーム活動	
	15	国際交流活動の推進	前日外国人へのインタビュー、海外の修学旅行受け入れ、マレーシアへの修学旅行	
共通教科の推進	学年	全学年(LHR)	卒業生・企業経営者・農業経営者による講演	
	普	国語	外部機関や各種コンクール課題への応募、検定試験	
	普	理科	DNA抽出などの実験やグループワーク学習とその発表	
	普	社会	「農芸高校をよくする政策」を考え、発表し、模擬投票を行う	
	普	英語	4技能・国際感覚などの育成、検定試験	
	普	数学	グループ学習、自発的な取り組み、検定試験、形成的評価で知識・技能の定着の把握	
普	保健体育	班やグループでの活動を通して周りとの協力し合い、行動する力を身に付ける		

また、15 事業及び共通教科の研究成果から抜粋して整理した簡易版ロジックモデルを示す(表 5-10)。このロジックモデルは本校の中核科目である「課題研究」「総合実習」における 15 事業及び共通教科ごとに実施した実践を単年度で効果測定を行い、必要に応じて軌道修正を図り、事業成果、生徒の変容、社会的インパクトを可視化することで成果を検証し、指導方法の改善につなげるシステムである。本校の教育活動について Research(調査)を起点にした Plan(計画)→Do(実行)→Check(評価)→Action(改善)のサイクルを検証するための指標となり、これによって各研究プロジェクトを持続可能な仕組みに移行できる。(詳細は研究実施報告書参照)

表 5-10 SPH 事業3ヶ年の各研究プロジェクトにおけるロジックモデルの成果一覧(抜粋:簡易版)

SPH事業3ヶ年の各研究プロジェクトにおけるロジックモデル(抜粋:簡易版)					
テーマの柱	事業番号	資源:インプット	生産・結果:アウトプット	生徒の変容:アウトカム	社会的インパクト
		何を投入したのか	何が生まれたか	何を学んだか、何ができるようになるか	どのような変化をもたらすか
		15事業と共通教科の魅力化	学校、地域、社会の教育資源	豊かなチャレンジ精神の涵養	地域に及ぼす影響
ア.学校農場におけるリソース循環システムの構築	1	農芸高校ブランドをめざした農産物の高付加価値化	百貨店での販売実習	消費者ニーズの重要性和理解	農産物の売上実績
	2・3	ゼロエミッションの構築 未利用資源の飼料化「エコフィード」	未利用資源の有効活用		
イ.地域・企業・大学・農政等のリソースの活用・循環	4・5	農作業の可視化・数値化 GAP教育の導入	農芸ボークンチュウの開発	地域農産物の大切さ	イベント開催数、来場者数
	6	農芸高校ブランドをめざした高度な食品製造技術の習得	大阪牛乳の開発への挑戦	循環型農業の重要性和理解	資格取得者数
	7	農芸高校ブランドをめざした商品開発	HACCAP推進農場認証	ブランド化・商品開発の難しさと楽しさ	大会での入賞
ウ.地域課題解決への参画	8	発信力の強化から地域創生へ	酪農教育ファーム活動	身近な課題発見・解決の重要性	メディア報道
	9	地域食文化・伝統食文化の理解・伝承	高校生カフェレストラン	環境問題に対する意識向上	学会発表・ポスター発表での実績
	10	子ども食堂への参画	海外への修学旅行	文化の多様性の理解と国際意識向上	交流した海外の学校
	11	災害時の非常用備蓄食品の開発			
エ.ESDの推進	13	「ネリカ米」の栽培と普及活動			
	14	動物を介した教育活動・食育活動			
	15	国際交流活動の推進			
共通教科の推進	学年	全学年(LHR)	卒業生(ロールモデル)による講演	共通教科の重要性的理解	指定校求人数、内定率
	普	国語	企業・農業経営者による講演	基礎・基本の充実	進学実績
	普	理科	資格取得・各種コンクール課題の応募	仲間との協力・行動力の向上	資格取得者数
	普	社会			
	普	英語			
	普	数学	グループワーク学習	選挙への理解度向上	選挙率

その他、本校 HP が全国の農業高校・農業大学校及び民間農業教育機関を対象にしたコンテストで、本事業を申請した平成 29 年度より連続受賞、本年度は近畿「ディスカバー農山漁村の宝」(第4回)選定地区団体部門受賞、第 27 回教育実践研究論文学校部門優秀賞を受賞するなどの成果(本事業の普及・推進)も生まれた。

【本校 HP(トップページ)の毎年4月1日～3月 31 日のユーザー数】

SPH 申請 平成 29 年度 第2回全国農業高校・農業大学校HPコンテスト農林水産大臣賞(ユーザー54,855)

SPH 第 1 年次 平成 30 年度 第3回同コンテスト農林水産大臣賞(ユーザー53,498)

SPH 第 2 年次 令和 元 年度 第4回同コンテストニュージーランド大使館賞(ユーザー63,722)

(5) 実施による効果とその評価

① 表 5-11 SPH事業3ヶ年のアンケートの結果(本校教員)

教員アンケート (SPH事業平成30年度(第1年次) 担当教員 n=16/20 有効回答率80.0%) (SPH事業令和元年度(第2年次) 教員(常勤) n=40/44 有効回答率90.1%) (SPH事業令和2年度(第3年次) 教員(常勤) n=43/46 有効回答率93.5%)		評価項目	達成値(4段階評価)		
			平成30年度 (第1年次)	令和元年度 (第2年次)	令和2年度 (第3年次)
質問1	SPH事業を通じて、生徒の専門分野に関する知識に変化がみられる	指導力の向上	3.2	3.1	2.9
質問2	SPH事業を通じて、生徒の専門分野に関する技術力が高まっている		3.3	3.1	2.8
質問3	SPH事業を通じて、生徒への指導力が高まっている		3.2	3.0	2.8
質問4	SPH事業を通じて、生徒のチャレンジ精神に変化がみられる	生徒の変容	3.3	2.9	2.7
質問5	SPH事業を通じて、生徒の職業に対する意識に変化がみられる		3.2	2.8	2.9
質問6	SPH事業を通じて、学校全体の教育活動が活発化している		3.3	2.8	2.7
質問7	SPH事業(授業など)の研究内容や取組について評価できる	普及度	3.4	3.0	2.8
質問8	SPH事業(授業など)の研究内容や取組は地域活性化につながる		3.3	3.1	2.9

本事業3ヶ年の本校教員アンケート結果を示す(表 5-11)。数値による4段階の評価レベルで実施した。学校全体では 60%となる 2.8 以上の達成値に質問 4,6 は届かなかつた。しかし、本事業に積極的に携わっている職員が 72.1%と前年度比の2倍以上と大幅に伸び、アンケート結果はすべて 2.8 以上(60%)の結果となるなど、教員の意識の高まりを確認できた。

② 表 5-12 SPH事業3ヶ年のアンケート結果(保護者)

保護者アンケート (平成30年度(第1年次) 全学年 n=289/576 有効回答率50.1%) (令和元年度(第2年次) 全学年 n=452/572 有効回答率79.0%) (令和2年度(第3年次) 全学年 n=236/575 有効回答率40.1%)		資質能力	達成値(4段階評価)								
			1年生			2年生			3年生		
			平成30年度 (第1年次)	令和元年度 (第2年次)	令和2年度 (第3年次)	平成30年度 (第1年次)	令和元年度 (第2年次)	令和2年度 (第3年次)	平成30年度 (第1年次)	令和元年度 (第2年次)	令和2年度 (第3年次)
質問1	農芸高校での学びに対して満足されていますか	学びの充実度	3.6	3.6	3.6	3.4	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5
質問2	農芸高校での学びは、地域の貢献につながっていると思いますか		3.6	3.5	3.4	3.4	3.4	3.4	3.5	3.3	3.3
質問3	農芸高校での学びを通してお子様は成長されたと思いますか		3.6	3.6	3.4	3.4	3.6	3.7	3.6	3.5	3.7
質問4	ご家庭で農業の深い話をすることがありますか	スキル	3.1	3.4	3.4	2.8	3.4	3.5	2.8	3.4	3.5
質問5	ご家庭で環境や世界について語り合うことがありますか	ビュー	2.4	3.4	3.4	2.5	3.2	3.4	2.5	3.1	3.2
質問6	お子様が自分の目標に挑戦していると感じますか	マインド	3.0	3.2	3.0	3.0	3.1	3.3	3.2	3.3	3.5

本事業3ヶ年の本校保護者へのアンケートの結果、すべての項目で目標値 2.8(60%)を超えた(表 5-12)。15 事業の認知度は全般的に向上し、「知らない」は 35 人のみと半減した。農芸祭の充実度が最も高く、次に農業クラブ、日々の授業となり、本校の教育活動に好ましい評価をいただいている。

③ 表 5-13 SPH事業3ヶ年のアンケート結果(関係先企業)

企業関係者アンケート (平成30年度(第1年次) n=9 有効回答率24.3%) (令和元年度(第2年次) n=14 有効回答率38.9%) (令和2年度(第3年次) n=4 有効回答率13.3%)		関連する 資質能力	達成値(4段階評価)		
			平成30年度 (第1年次)	令和元年度 (第2年次)	令和2年度 (第3年次)
質問1	SPH事業を通じて、専門分野に関する技術力が高まっている	専門力	3.4	3.4	3.8
質問2	SPH事業を通じて、生徒への指導力が高まっている	指導力	3.6	3.6	3.5
質問3	SPH事業を通じて、学校全体の教育活動が活発化している	普及度	3.6	3.8	3.8
質問4	SPH事業を通じて、生徒の興味関心に変化がみられる	生徒の変容	3.7	3.8	3.5
質問5	SPH事業を通じて、生徒の知識・技術に変化がみられる		3.2	3.5	3.5
質問6	SPH事業(授業など)の研究内容や取組について評価できる	発展度	3.7	3.6	4.0
質問7	SPH事業(授業など)の研究内容や取組は、地域活性化につながる		3.7	3.6	4.0

本事業3ヶ年の関係先企業(直接生徒にご指導いただいた関係企業先のみ)に対して行ったアンケートの結果を示す(表 5-13)。質問 6, 7 のように本事業及び本校の教育活動を理解し、高評価をいただけていることが何より嬉しいことである。

引き続き、15 事業及び共通教科を整理したロジックモデルによる持続的な学習プログラムを展開することで、今後も学校・地域・社会の教育資源を活用して生徒の学びが深まる教育活動を展開していきたい。